

片上宗二著『社会科授業の改革と展望 ——「中間項の理論」を提唱する——』

(明治図書, 昭和60年)

谷 川 彰 英

ちょうど一年前の暮れ(1984年), 私は集中講義のため茨城大学に伺っていた。その時, 著者の片上氏は本書の原稿整理のため多忙を極めていた。何人かの女子学生に清書を頼み, それをチェックしていた著者の姿が懐かしく浮んでくる。

世代をほぼ同じくする社会科教育の研究者として, 本書の刊行に対して心からお祝いの言葉を述べたい。

さて本書で著者は「中間項の理論」を提唱し, 新しい社会科授業論を構築されようとしている。この「中間項の理論」とは「社会科の本質論(社会科とはどのような教科か, 社会科は何をめざすべきか, 社会認識とは何か, といったテーマについての検討を主たる任務とする社会科教育論)と, 社会科の技術論(社会科の板書をどうするか, 社会科における資料の活用をどう図るか, といった問題についての考察を中心課題とする社会科教育論)との中間に位置する, 新しい社会科授業論」(まえがき)のことである。

「新しい」という以上, 古い何かを想定しているはずであるが, それは何かといえば, いわゆる「問題解決型」の社会科授業論である。つまり「子どもに学習問題を把握させ, その問題に対する予想(仮説)を立てさせ, 資料等に当たらせたり調べさせたりして, その予想を確かめ(検証)させていくように社会科の授業を組み立てるべきだという」(まえがき)考えに立つ授業論である。具体的には検証学習, 発見学習, 探究学習, 主体的学習を指す。

第Ⅰ章では, 社会科教育論の現状を批判的に分析するなかで, 「中間項の理論」の必要性が説かれている。「問い—答え」の例は別に新しいものではないが, 「今求められているのは第3の道, つまりは, 教師と子どもが努力して, 『わからなさ』を残していけるような授業である」(41頁)は大きな発想の転換である。私のいう「契機」論にもつながってくる。また「驚き」を利用する授業は「教師と子どもとの間の『情報量間格差』に頼る方法である」(43頁)は慧眼である。

第Ⅱ章は「社会科における『思考の往復運動論』」, そして第Ⅲ章は「社会科における『知識論』」となっているが, この2章が「中間項の理論」を支える理論である。

第Ⅱ章の「思考の往復運動論」では、デューイに始まる(というよりも、誤解されて一般化されてしまった)「思考のワンウェイ論」を批判しつつ、思考するというのは、問題解決していくというよりも「むしろ、私たちを取りまく事象や出来事に対して不十分ながらも問いかけ、それに対する何らかの答えを引き出しては、またその対象に問いかけていくという、そのような往復運動の形で捉えられた方がよいのではないか」(63頁)と主張する。

また第Ⅲ章では、従来の「獲得型」の知識論から「成長型」の知識論への転換を主張しており、興味深い。

第Ⅳ章では、「中間項の理論」による社会科の授業構成が論じられており、「問いかけ主導型で思考の往復運動型」の授業と、「対象受容型で思考の往復運動型」の授業の二つの異なる授業パターンを提唱している。そして、それに基づいて第Ⅴ章では、三つの実験授業の内容が紹介されている。

全体としては、急いで書いたためか、論理に飛躍がある所がいくつか認められるが、多くの点で教えられた。「思考の入力論」「疑問の湧き出し」「発達余力論」などの著者の造語もさることながら、研究者が新しい理論を作る際の良いモデルを提示してくれたことが最も大きな意味ではないかと思う。

しかし、いくつかの点で不満足な点もあるので、それらについて若干述べておきたい。

第一に、「中間項」の意味であるが、これが単に本質論と技術論の「中間」であるという程度ならば、ややオーバーではないかということである。もう少し知識論などの具体的な理論で「中間項」を論じていただきたかった。

第二に、「知識論」であるが、「獲得型」と「成長型」という二つの対比だけでは理論に深まりがないという点である。上田薫氏の知識論に学んだらもう少し違った記述になったのにとと思われる所がいくつかある。

第三に、「問いかけ主導型」と「対象受容型」の授業構成が、実際のカリキュラムに即して言えば、どのような単元ならばどちらの型がふさわしいかが不明確である。

これらは著者片上氏への注文でもあるが、同時に評者の私自身に向けられた課題でもある。日本の社会科授業改革のために、著者が提起している新しい芽を私たちの共有財産にしなければならぬ。

(千葉大学教育学部)